

新『学習指導要領』「伝統的な言語文化」に即した 入門期漢文教育法 —『論語』副教材・カルタを用いて—

矢羽野 隆 男

キーワード：古典教育、漢文教育、音読、副教材、『論語』カルタ

はじめに—小・中学校の新学習指導要領における漢文

新『学習指導要領』（以下、新『指導要領』）では、小学校・中学校にも〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられ、小学校の高学年から音読を中心とした古文・漢文の学習が盛り込まれた。また中学校では1年次に文法・語法の基礎（漢文では訓点、書き下し文、助字など）が学習される。古典の学習においては音読による文語表現の涵養が有効で、その意味で新『指導要領』の方針は望ましい。ただ新『指導要領』に基づく小学校・中学校の改訂教科書に収める古典教材は分量的に限られ、音読による古典学習の十分な効果は期待し難い。とはいえ、現実として国語の正規授業で古典学習に多くの時間を割くのも難しい。

本稿は、このようなジレンマを克服する一つの試みとして、小学校高学年から中学校にかけての入門期の漢文学習における教育法を提示するものである。具体的には、『論語』の漢文教材としての有用性に着目し、正規授業以外の細切れの時間も活用できる音読学習を想定し、『論語』の副教材化、学習の動機づけとしての『論語』カルタを提案する。

一 小学校国語教科書における『論語』教材

1. 新『学習指導要領』に関連して

平成20年3月に公示された小学校・中学校の新『指導要領』において、〔言語文化と国語の特質に関する事項〕が小学校・中学校の全学年に新設された。これまで「言語文化」は高等学校の目標で示されるのみであったが、今回の改訂で小学校・中学校にも伝統的な言語文化に対する理解が求められるようになった。

具体的に、小学校の新『指導要領』（第5学年及び第6学年）における〔言語文化と国語の特質に関する事項〕（ア 伝統的な言語文化に関する事項）の記述を見れば、「『A話すこと・聞くこと』、『B書くこと』及び『C読むこと』の指導を通して、次の事項について指導する。」として、次のように記す。

（ア）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。
また中学校の新『指導要領』(第1学年)には次のよう記す。

(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

つまり、小学校5・6年次から古文・漢文について大体的内容を知り、音読し、古人の見方・感じ方に思いを寄せ、中学校1年次で、古文では歴史的仮名遣いや日本の古典語彙、漢文では訓点や置き字などの助辞について基礎的なことを学び、また音読を通して古典のリズムを体感することになったのである。ここで、小学校高学年から中学校1年次にかけての時期は、古文・漢文の大意の把握・基礎知識の理解とともに音読が重視されていることに注意したい。

古典は現代語とは異なる独特のリズムをもつ。古文の優美さ、和歌の五七調の心地よさ、漢文訓読の簡潔さなどは、繰り返し声に出して読むことによってこそ感得できる。また、それによって文語のリズムや言い回しが身に付き、後に文語文法を学習する際の素地にもなる。動詞・助動詞の活用変化や接続などの文法事項も、「知らざるべからず」「何ぞ言はざる」などといった文語表現に慣れ親しんだ素地があってはじめて根付くものである。「～べからず」という文語の素地のない者に、「否定の助動詞『ず』は未然形接続だから、『べし』に『ず』をつけるとどうなる？」といくら誘導しても、「べし - ず」「べか - ず」「べき - ず」などと当て推量を繰り返すばかりであろう。文語表現の素地が無ければ、用言の活用変化などは無意味な記号の羅列に過ぎず、それを記憶することは極めて負担の大きな学習となる。

文法は言語現象の説明である。言語現象を正確に深く理解するために文法は有用だが、初歩的な文法がわかるためには言語的な素地・素養が不可欠である。その意味で、古文・漢文の音読・暗誦は、後に文法・語法を学習して理解を深めていく上で、遠回りのようだが、非常に有効な方法だといえる。

新『指導要領』に基づく学習指導は、小学校は平成23年度から、中学校は平成24年度から全面実施となり、各校種の教科書も新『指導要領』に合わせて改訂された。ここで採用件数の多い出版5社が発行する小学校の新教科書における漢文教材を抄出すると次の通りである(仮名遣い・送り仮名等の表記は各教科書の表記に従った)。いずれも音読によって漢文のリズム・響きを味わうことを主な目標にしている。なお、紙幅の関係で中学校の新教科書に所収の漢文教材の抄出は省略するが、『論語』教材の収録状況は《付録2》に表示した。表からは、小学校と中学校とで扱われる『論語』教材の分量にほとんど差がないことが見て取れよう。

『国語 五 銀河』(光村図書、平成23年2月10日発行)

「声に出して楽しもう」(原文なし)

- ・子曰はく、「己^しの欲^いせざる所^(わ)は、人に施^{おのれ}すこと勿^{ほつ}かれ。」と。
- ・子曰はく、「過^(わ)ちて改^{あやま}めざる、是^{これ}を過^うちと謂^いふ。」と。
- ・子曰はく、「学^(わ)びて思^(わ)はざれば、則^{すなわ}ち罔^{くら}し。思^(い)ひて学^{あやう}ばざれば、則^(い)ち殆^{あやう}し。」と。

『新しい国語 六上』（東京書籍、平成23年2月10日発行）

「漢文を読んでみよう」（原文あり）

- ・百聞は一見にしかず。
- ・一を聞きて以つて十を知る。（論語）
- ・子曰はく、故きを温めて新しきを知らば、以つて師となるべし。」と。（論語）
- ・一に曰はく、和を以つて貴しとし、さかふること無きをむねとせよ。
(聖徳太子「十七条の憲法」)
- ・孟浩然「春暁」

『みんなと学ぶ小学校国語 六年上』（学校図書、平成23年2月10日発行）

「漢詩を味わおう」（原文あり）

- ・高啓「胡隱君を尋ぬ」

『ひろがる言葉 小学国語 五上』（教育出版、平成23年1月20日発行）

「漢文に親しむ」（原文なし）

- ・孟浩然「春暁」 ・李白「静夜思」
- ・故きを温めて新しきを知る。（論語）
- ・心焉に在らざれば視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえども其の味を知らず。
(大学)

【付録】〔文化〕「漢文を読もう」（原文なし）

- ・蘇軾「春夜」 ・杜牧「江南の春」 ・高駢「山亭の夏日」
- ・学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや。朋の遠方より来たるあり、亦た樂しからずや。
- ・吾れ日々に三たび吾が身を省る。
- ・故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。
- ・仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。
- ・己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ。（以上ともに論語）

『小学校の国語 六年』（三省堂、平成23（2011）年2月25日発行）

「声に出して読もう——漢文」（原文あり）

- ・学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。朋あり遠方より来たる、亦た樂しからずや。
- ・吾れ日に三たび吾が身を省る。
- ・故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。
- ・仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。
- ・己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ。（以上ともに論語）

『日本語』（世田谷区教育委員会、2007年3月30日発行）

東京都の世田谷区では、『学習指導要領』など全国一律の規制によらない日本語教育を行う「日本語特区」の認定を受け、平成19（2007）年度から、区立の全ての小学校・中学校において、

教科「日本語」を実施している。

小学校では、国語科の授業以外に、週に1時間、短歌・俳句・古文・漢詩・論語・近代詩などを音読・朗唱する活動を通して、日本語の美しい響きやリズムを楽しむ学習を行っている。独自に教科書『日本語』（一・二年、三・四年、五・六年の3冊）を編纂し、収録作品は漢詩・漢文に限っても、漢詩22首（絶句：19首、律詩：3首）、『論語』18章に及ぶ。収録数が多いので引用は省略するが、そこに収める『論語』の章句は《付録2》に表示した。

こう見れば、新『指導要領』で「伝統的な言語文化」が重視された結果、旧『指導要領』に基づく小学校教科書にはほとんど収めなかった漢文教材が盛り込まれ、音読に重点を置いた学習が行われることとなった。これは学習の方向としてはたいへん望ましいことである。

しかしながら、この分量では、先に述べたような、古典を繰り返し声に出して読み、独特のリズムや言い回しを身につけるという理想にはほど遠い。小学校高学年から中学校にかけてのごく一時期に単元教材としての音読に取り組み、単元が過ぎれば古典に触れる機会がないというのでは効果は期待薄であろう。とはいえ、他にも重要な学習事項の多い国語科の貴重な時間を古文・漢文の学習にそう多く割けるものではないのが実情である。

こうしたジレンマの中で、もう少し学習量を増やしながら、国語科の授業時間を圧迫することなく、しかも生徒たちが前向きに音読・暗誦に取り組める教材・指導法として有効と考えるのが、以下に示す『論語』副教材および手作り『論語』カルタである。

二 なぜ『論語』か

『論語』の副教材化、『論語』カルタに話を進めるのに先だって、なぜ『論語』をことさらに取り上げるのかという点について考えるところを記しておきたい。

1. 〈人の道〉を説く東洋の古典

東洋では近代以前、長らく学問といえば主に漢学であった。現代でいう人文科学（倫理学・歴史学・哲学・文学）、社会科学（法学・政治学）、そして自然科学（天文・医学等）まで、漢籍を通じて学ばれることが圧倒的に多く、その漢学の中心にあるのが儒教であった。

儒教が追究したのは〈家族を中心とした社会における人の在り方〉である。儒教は、中国では漢代以来国教の位置にあり、その影響は単に倫理・哲学だけでなく、文学・歴史、政治・経済など多方面に及んだが、中核にあるのは〈人は社会的に如何にあるべきか〉の探究である。

どの文化においても、世俗に在る者をして俗に染まらぬ価値へと目を向けしめ、社会秩序を安定維持する教えが存在する。多くの場合、宗教がその役割を果たすが、東洋においては仏教とならび儒教がそれを担当した。儒教は、知・徳を兼ね備えた「君子」を理想的人格として目標に据え、家族における「孝」を中核に、その心情を他者に対する「忠恕」「仁」（思いやり・人間愛）の実践によって広く社会に波及させ、社会の安寧秩序を図った。儒教には他の宗教のような聖職者や世俗外にある理想郷の観念がない。この世俗に在って世俗の価値観に溺れず理想に向かって生きることを説く教えである。

『論語』の日本への伝来は記紀によると応神天皇の頃とされる。儒教は仏教とともに日本人の生命観・倫理観の重要な部分を形作ってきた。と同時に、それは漢学を中心に在って、多く思想・論理といった日本人の理性面を担当し、仏教や和学が人生観照の態度や文学的情緒、自然観といった感性面を担ったのと併せて、ちょうど車の両輪のような役割を果たしてきた。

『論語』は、儒教経典の中でも、孔子の直接の言葉や行動が記録された最も身近な経典である。しかも、後述のように、ごく短い章句で簡潔に表現され、読者を選ばない普遍性がある。限られた経験から見ても、大人が思うほど子どもはそれを難しいとは思っていないようだ。小学校高学年の生徒なら充分に取り組める。大事なことは示し方・取り扱い方である。

2. 小学校・中学校の「道徳」との関係

儒教倫理というと、それは前近代の封建道徳で、自主独立を重んずる現代の倫理観と齟齬があると見る向きもあろう。確かに、政治体制や男女の社会的関係などが現代とは大きく異なっていた2500年前に生まれた思想であるから、全てがそのまま現代に通用するわけではない。が、利己主義を個人の自由と履き違え、社会的道義心が希薄化しつつある現代において、〈人は社会的に如何にあるべきか〉を考えた儒教に触れる意義は、マイナスよりもプラスのほうが大きいと思う。

それに儒教倫理とはいえ、現代社会の価値観と通じるものも多い。試みに、中学校の新『指導要領』『道徳』章に掲げられた「道徳教育の内容」からキーワードを抜き出し、それと対応する『論語』が重視する徳目や徳性を（ ）に括って挙げてみる。その関連の深さが見て取れよう。

強い意志（剛毅・弘毅）	誠実・信頼（忠信）	勇氣（勇）
真理を愛し求める（知、好学）	礼儀（礼）	人間愛（仁）
思いやりの心（忠恕）	友情（友）	寛容（寛・簡）
謙虚（謙・謹）	人間の力を超えたものに対する畏敬（命）	
義務・正義（義）	生命の尊重、父母・祖父母への敬愛（孝）	
年長者への敬意と感謝（孝弟）		

小学校・中学校における「道徳」教育は、道徳の時間だけでなく学校の教育活動全体を通じて行くとされる。『論語』の内容はかなりの部分で「道徳」の内容と重なり合う。『論語』の朗読は、おのずと道徳教育の意味を果たすことともなろう。敢えて強調しておくが、『論語』を道徳の教科書のように絶対視して教条的に教えることを意図するのでは決してない。内容面で意図するのは、繰り返し音読することによる道徳性の涵養である。

3. 普遍性

漢文の名句名言といって思い浮かぶものにどのようなものがあるだろうか。「朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや」、「故きを温めて新しきを知る」、「一を聞いて十を知る」、「義を見てせざるは勇なきなり」、「過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し」「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」、「徳は孤ならず」、「後生畏るべし」等等、これらはみな『論語』を典拠とする、す

でに格言といってもよい名句名言である。これ以外にも『論語』には寸言ズバリ核心を突く格言的な章句が数多くみえる。後に紹介する種々の『論語』カルタが生まれるのも、このような簡潔で智慧に富んだ素材に溢れているからである。

『論語』の言葉が格言的なのは、その成立の事情による。中国における現存最古の図書分類目録である『漢書』芸文志（六芸略）に、『論語』成立の経緯を次のように記す。

『論語』は、孔子^{ていし じじん} 弟子時人に應答し、及び弟子相與^{あひとも}に言ひて夫子^{ふうし}に接聞するの語なり。當時弟子^{おのおの}各^{しづつ}記す所有り。夫子既に卒し、門人相與^{あつ}に輯めて論纂^{ろんせん}す。故に之を『論語』と謂ふ。（論語者、孔子應答弟子時人及弟子相與言而接聞於夫子之語也。當時弟子各有所記。

夫子既卒、門人相與輯而論纂、故謂之論語。）

孔子が弟子や同時代の人々に応答し、また弟子が対話を通して孔子から直接聞いた言葉（語）を、孔子の死後、門人（孔子の弟子の門人）が集めて論纂（整理・編集）した書が『論語』だという。「語」は『説文解字』に「直言を言と曰ひ、論難を語と曰ふ」（三篇上、言部、「言」字説解）とあるように、一方向の発言を「言」というのに対して、双方向に議論する言葉を指す。つまり、『論語』とは、孔子と弟子との対話の言葉（語）を整理編集（論）した書、すなわち〈師弟の対話編〉の意味ということになる。

このように、『論語』の言葉は、弟子が対話を通して得た孔子の言葉がもとになっている。それは本来、第三者を意識して記した客観的な論述ではなく、弟子の心に刻みつけられた師の言葉の私的な記録・メモの類であった。弟子にとって、師の言葉が発せられた状況や文脈は説明を要しないことで、大切なのは自ら得た師の言葉のみであった。『論語』に、単に「子曰く」とのみ記す多くの章句は、当事者にとって自明であった師弟の対話の背景や個別的な事情が脱落し、対話におけるエッセンスのみが残ったものといえる。もっとも、『論語』はこのような言葉ばかりではない。対話の状況が記され、人生や学問に対する真摯な師弟の交流が彷彿とされる部分もあり、師弟の人間性に想像を膨らませて文学的に読むこともできるが。

対話の背景や個人的な事情といった状況が抜け落ちた結果、『論語』の言葉は「ある時代に、ある状況で、ある人物に対して」という特殊個別の限定から解放され、「あらゆる時代の、すべての人に」という普遍性を得ることとなった。この普遍性によって、現代に生きる我々も、中国古代の『論語』の言葉を我が身に引き寄せて読み、各人各様の思いを抱くことができる。また読み直すごとに、読み手の状況に応じて新たに何かを得ることができるのである。

この普遍性ゆえに、時代的あるいは個別的な説明を加える必要がほとんどない。「義を見てせざるは勇無きなり」は、大意の把握にことさらな説明を要すまい。確かに『論語』は漢文の書き下し文のままでは難しい部分もある。しかし、文言の細部にこだわらず、分かりにくい語句に簡単な解説を添えさえすれば、小学生でも十分に理解できる。

『論語』の普遍性と対照的な面をもつのが、漢詩や史伝などの文学的な作品である。たとえば漢詩の場合、どうしても作者の個性の表出という文芸の性質から、作者の境涯、作品成立の背景、社会事情など個人的・時代的な状況を見捨てることは難しい。例えば、中学校の漢文教材として多く取り上げられる杜甫の「春望」を例に見てみよう。大意把握のために簡単な説明を加えるにしても、

「杜甫（712～770）は唐（日本の奈良時代に相当する時代）の詩人である。」「当時、国家が大混乱に陥るほどの戦乱があり、杜甫は反乱軍によって都に軟禁され、地方に疎開させている妻や幼子とは音信不通の状況にあった。」「戦乱は容易に収まらず、戦闘を知らせる烽火が数カ月も止むことがなかった。」「当時の男性は冠を被り、それを簪^{かんざし}で留めていた。杜甫は心労のため頭髪が薄くなり、簪を留めることもかなわなくなるほどであった。」

と、この程度の補足説明が必要となろう。このように「春望」のような文学作品は特殊個別の要素が多く、細切れの時間を効率よく使って多く読むという学習には不向きな面がある。もちろん、「春望」を学習した後に音読の副教材に加えることをも困難とするのではない。

三 『論語』の副教材化

『論語』は、小学校・中学校における入門期の漢文教材に、とりわけ国語の授業時間外の短い細切れの時間を利用した音読教材に適している。そこで、一定期間音読を繰り返すことによって漢文のリズムや言い回しを体得することを主な目的とし、加えて古人の言葉を自分の生活にあてはめて考えさせることをも意図した『論語』副教材（例）を作成して《付録1》に掲げた。この教材例を作成するに当たっての考え方、その使い方は次の通りである。

1. 素読の伝統を受け継ぐ

日本には古来「素読」という学習方法があった。文章の内容理解は二の次として、まず何より声に出して繰り返し漢文を読み下し、漢文訓読を血肉化するというものである。この学習法の効果は高く、江戸・明治の日本人の漢文の素養は高かった。西洋からの新知識を短期間に吸収できたのも、新しい概念に適切な漢語の訳語を当てて日本語に取り込む高い漢語の運用能力があつてのことであつた。この教材では、〈本文〉を繰り返し読むことを主な目的にする。

2. 習慣化

音読を繰り返し、リズム・言い回しを体得するのが主目的なので、一定期間、継続するものとする。例えば、始業・終業の学級活動の時間、道徳や総合学習の時間の一部などを用いる。まとまった時間ではなく、細切れの時間で十分に実施が可能である。経験からすると、後述のような〈学習の手順〉で行えば、1回につき5分ほど、10分もあれば充分であろう。

毎回の学習への動機づけとして、学習期間の締めくくりに『『論語』カルタ大会』などを設定すれば、前向きな取り組みを促すことができるだろう。特に団体戦を組めば、グループ内で音読・暗誦の練習に盛り上がりを見せることが期待できる。

3. 体系化

『論語』は一定のテーマのもとに趣旨一貫して論述されたまとまりある論文ではなく、師弟の対話を編纂したものである。全20篇から成るが、学而篇、為政篇などという篇名は、篇の主題を示すのではなく、その篇の第一章の冒頭の文字を取って、例えば学而篇ならば、「学びて時に之を習ふ（学而時習之）」の冒頭の2字「学而」を取って篇名にただけである。精細に

見れば、各篇の内容はそれぞれ特色がうかがえるし、主題を共通にする章を一まとめにする部分もあるが、基本的には孔子の言葉を特に明確な方針なく配列した雑纂の書である。

そこで、副教材の作成に際しては、『論語』に見える主要なテーマを選び、そのテーマに関する章句を選ぶこととする。これにより、雑然とした『論語』の章句に統一性をもたせ、音読を中心としながらも主題をしっかりと押さえることができ、学習が効果的となる。

設定するテーマとしては、「道徳」の内容も勘案して、以下のようなものが考えられる。いずれも、『論語』が繰り返し強調し、普遍性をもつ重要な徳目・行為である。

学（学ぶことの喜び・大切さ）	孝（両親・祖父母への愛情、命の大切さ）
仁・忠恕（他人への愛情・思いやり）	君子（理想とする人格）
義・道（社会正義）	忠信（誠実さ・信頼）
言葉と実践（行動を伴う言葉）	過ちと反省

4. 付随的に

音読ばかりで単調であれば、その回の章句に見える漢字の成り立ちなどを適宜紹介して興味をもたせることも効果的である。漢字の成り立ちは、大人にとっても興味深いものだから、「面倒な筆画の漢字が、実はこんな絵からできていたなんて」と、きっと生徒の多くも関心をもってくれるだろう。のみならず、字形の分析による字源の説明は、その字のもつ本質的な意味を具体的かつ端的に示すものなので、内容理解をも深めてくれる。

例えば、「学びて思はざれば、則ち罔し。」について、

学（學）：子どもが他者から知識を与えられる形。新たに知識・技術を得るという意味。

思：泉門の見える新生児の頭骨を上から見た形。ピクピク動く泉門の形から、頭を働かせて思考するという意味。

罔：「网（あみ）」の形に音を表す「亡」を加えた字。網を被されたようにボンヤリして物事がハッキリわからないという意味。

などと説明し、さらに甲骨文・金文などを簡単に書き示せば、生徒は意外な字の成り立ちに興味を向け、『論語』の内容理解も深まるだろう。ただし、このような説明には相応の時間を要するので、毎回このようなことをする必要はない。

5. 教材化の例

《付録1》の『論語』副教材は次の6テーマによる全6章とし、1章はテーマに関連する5つの章句から構成した。週5日、1ヶ月半（6週間）続けることを想定したものである。

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 一、学—学ぶこと— | 二、意志・行動—継続の大切さ— |
| 三、孝悌—身近な人々への愛・敬い— | 四、朋友—友だちとともに— |
| 五、仁—思いやり・人間らしさ— | 六、君子—すぐれた人とは— |

以下、教材の一部を例にあげ、具体的に説明する。

【本文】 ① 子曰はく、「^{い(わ)}学びて時に^{これ}之を^(う)習ふ、^ま亦た^{よろこ}説ばしからずや。…」

【訓読文】 子曰^{ハク}、学^{ビテ}而時^ニ習^フレ之^ヲ、不^レ亦^タ説^{バシカラ}ズ乎^ヤ。(學而篇第一)

【大意】 先生はおっしゃった、「新しいことを知って、事あるごとにそれを繰り返すことは〔自分の進歩が見えるので〕、なんともうれしいことではないか、そうだろう。」

【ひとこと】 ◎「学習」とは繰り返して身に付けること。学習は楽しい。

【語句説明】 ○子…「こども」ではなく、「先生」の意味。○学びて…新しい知識・技術を得ること。○時に…いつも、事あるごとに。「時たま」ではない。○亦た～ずや…なんと～ではないか、そうだろう、と感動を相手に伝える言い方。

本文(書き下し文) 漢文を書き下し文の形で示した。傍線部分は、後述するカルタ作成の際に、取り札に書く文言。前半を聞いて、後半(傍線部)を取るいわゆる「百人一首式」で遊ぶための用意である。

訓読文 漢文で記された原文に訓点を施したもの。小学生には、これを説明したり読ませたりしなくてよい。質問があれば、「もともと漢字だけで書かれた中国の文章に、日本語で読めるように記号(＝訓点：送り仮名、返り点等)をつけたものだ」と説明すればよい。もちろん、興味を示す生徒には読み方を教え、訓読文で読めるように手ほどきする。漢文訓読の基礎を学んだ中学生なら、「こちらでも読めるね」と注意を喚起する。()は出拠。『論語』は学^{がく}而^じ篇第一から堯^{ぎょう}日^{えつ}篇第二十まで全20篇からなる。

大意 基本的には、大体はこんな意味だと、通して確認する程度でよい。時間があれば、本文の語と関連させて、「『学ぶ』とは、新たな知識や技術を得ること。『習ふ』とは、繰り返して経験を重ねること。新たに得た知識や技術を何度も使って自分のものにすること。」などと、ポイントを説明してもよいが、くどくどしくならないように注意したい。

ひとこと 伝えたいこと、考えてほしいことを、◎印の下に簡潔に記してある。時間があれば、これを使って、考えを述べあうのもよい。中学校の教科書では、『論語』など中国古典を教材とした学習において、「自分の生活に照らして考えさせられたことを出し合おう。」(学校図書『国語2』)、「論語の文章から一つ選び、身近な事柄にそれをあてはめて自分の考えを文章にまとめよう。／論語の文章に示された孔子の考え方について、感想を発表しよう。」(教育出版『伝え合う言葉 中学国語2』)、「中国の古典の言葉の一節を引用し、三百字程度の文章を書こう。」(三省堂『中学生の国語 三年』)といった、古典の言葉を自分の身に引き寄せて考え、それを文章にまとめる課題が設けられている。ときどき〈ひとこと〉からの展開で、「『学習』は、国語・算数(数学)とかの勉強に限らない。経験を繰り返して自分のものになったこと、それで喜びが湧いたことにどんなことがある？」などと考えさせ発表させるのも、後にそれを文章化するときの基礎となるだろう。

語句説明 いちおう簡単に説明を施したが、生徒が授業外や自宅で意味を確認するための用意

である。基本的には、これを参照して細かく説明を加えることはしない。説明は詳細に書くと、かえって意欲を殺ぐ恐れがある。意識して記述を簡潔にする方がよいだろう。

学習の手順

- ①まず〈本文（書き下し文）〉を音読する。教師が模範朗読し（読みが分からない言葉には振り仮名を振らせ）、その後、生徒に声を合わせて2～3度音読させる。
- ②教師が〈大意〉に沿って簡単に説明する。時間があれば、〈語句説明〉の内容などを踏まえて解説を加えるが、簡潔を心がける。
- ③大体の意味が分かった後で、さらに1～2度、全員で声を合わせて〈本文〉を音読する。
- ④◎に触れて、一言メッセージを添えたり、生徒たちに問いかけたりする。
- ⑤最後に、もう1度〈本文〉をゆっくり音読する。その際、「暗誦できる者は教材を伏せて暗誦に挑戦しよう」と暗誦を促し、教師も生徒たちとともに暗誦する。これで1回分の朗読は終了である。
- ⑥1回朗読したらそれで終わりとするのではなく、音読を反復する機会を設ける。例えば、新しい教材に入る前に、前回の教材を1度全員で音読する。また、章の第5番目の教材を終えたら、1章の5つの教材を通して音読する、など。

四 『論語』カルタの導入

1. 各種の『論語』カルタ

副教材による音読により積極的な取り組みを促す方法としてカルタの利用を提案したい。

『論語』はすでに述べたように、現代にも通じる教えが簡潔な表現のうちに盛られた身近な古典であることから、『論語』を材料とした各種のカルタが制作されている。それぞれ章句の選択の仕方や遊び方、付録などに特徴がある。以下に筆者が入手した5種のカルタについて、その特色を簡単に紹介する。なお、各カルタが収録した『論語』の章句は、前述の各社教科書所収の章句とともに、『付録2』に一覧表にまとめてまとめた。共通して採られる〈外せない名句名言〉がある一方で、採られる章句に相当の違いがあり、各編者の思いも推察できて面白い。《付録2》の一覧表は、独自に『論語』の副教材・カルタを作成する場合の参考になろう。

A 『百人一首式 論語カルタ』（不二見達朗・吉木靖範・市丸悦子・武田耕一 監修、公益法人「孔子の里」〈佐賀県多久市〉、平成13〈2001〉年、2500円）

『論語』の章句100句を収録する。筆者の見た範囲では最も多くの章句を収める『論語』カルタである。いわゆる「百人一首式」の形式で、読み札には章句全体の文言を記し、取り札には章句の後半のみを記す。章句の意味は読み札に簡潔に記す。読み札・取り札にはともに章句の内容を現代生活に引き当てた絵が描かれる。素朴な手作り感のある楽しい絵である。付録として一枚物の収録章句一覧を付す。



取り札

読み札

B『論語いろはカルタ』（公益法人「孔子の里」〈佐賀県多久市〉、平成12（2000）年、1500円）

訓読した『論語』の章句を「いろは」別に47句収録する、いわゆる「いろはがるた式」のカルタで、読み札には章句全体の文言を記し、取り札には章句の冒頭の仮名1字のみを記す（「学びて時に之を習う」の章句なら取り札に「ま」と記す。）Aの百人一首式よりも年齢の低い幼時でも遊べる。章句の意味はAと同様に読み札に簡潔に記す。取り札にはAと同様の図柄でパステル調の優しい絵が描かれる。付録に一枚物の収録章句一覧を付す。



取り札

読み札

C『あしかが論語名句選かるた』（須永美知夫 執筆・監修、足利商工会議所〈栃木県足利市〉、2010年、2100円）

訓読した『論語』の章句を五十音に従って41句収録している（「ぬ」「ら」「る」の3音を欠く）。読み札には、オモテ面に章句を上の方と下の句とに分かち書きしてあり、ウラ面に比較的詳しく章句の意味を記す。取り札には、章句の全文と冒頭の仮名1字とを記した面（A）と下の句だけを記した面（B）の両面がある。

遊び方の解説によると、取り札のA面を用いれば、「いろはがるた式」（小学校低学年～）、B面を用いれば「百人一首式」（小学校高学年～）、さらにA面を向けた採り札を並べ章句の意味を聞いて札を取る遊び方（中学生～）という具合に、難易度の違う3種の遊び方ができる。

読み札には章句の内容を現代生活にうまく当てはめた絵が明るい色遣いで描かれる。

一枚物の付録「足利学校と論語」は、「足利学校」「孔子と論語」「論語かるたについて」「史料足利学校参観案内」「かるたの遊び方」の項から成る解説。また付録冊子『論語抄』はカルタの監修・執筆者の須永氏が抄出した『論語』章句64句の訓読・通釈をまとめたもの。ただし、カルタ所収の章句とは必ずしも一致しない。

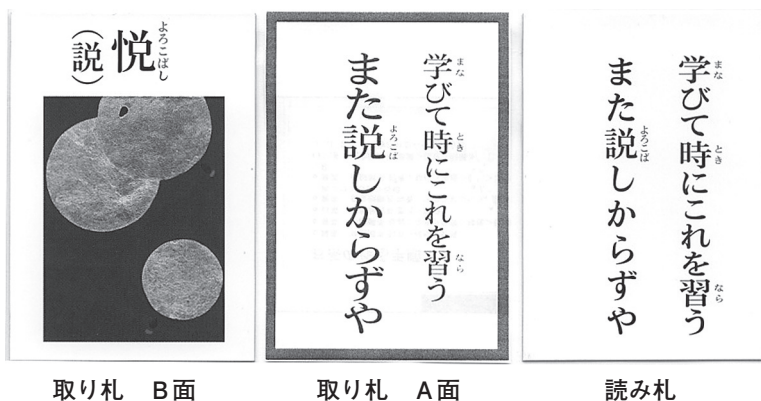


D『論語かるた』(久井勲 編集、木下鉄矢 監修、備前商工会議所〈岡山県備前市〉、2011年、2500円)

『論語』の章句50句を取める。読み札には、章句の文言を2行に分ち書きにする(右が上の句、左が下の句)。取り札は、読み札と同様に章句を2行に分ち書きにした面(A)、章句の文言を代表する漢字1字を記した面(B)との両面がある(「学びて時に之を習う、また説しからずや」の章句なら取り札に「悦(説)の1字を記す)。

付録の「遊び方」によると、取り札のA面を用いて、下句に着目して札をとる「百人一首式」の遊び方を基本とし、ほかにB面を用いて、読み札を通して読んだ後に漢字だけを繰り返し読み、B面の漢字1字に着目して札を取るという2種の遊び方がある。B面には『論語』の章句のテーマが倉敷芸術科学大学日本画コースの方々によって日本画画法による美しい図柄に描かれており、美術的にも楽しめる。

『論語』の章句の解説は札に記されず、付録冊子『論語かるた 解説』(久井勲編)にまとめられている。ユニークな内容で、〈書き下し〉〈句の意義(直訳でない現代的な意義)〉に続いて「対話」の項を設け、章句の内容に関して「ゲーテ『ファウスト』におけるメフィストフェレスとファウストとの対話のように」A・B2つの立場からの解釈が掲げられる。『論語』の言葉をドグマ的に受け取るのではなく、主体的に受け取ることを期待しての工夫である。さらに「エピソード」の項には、章句の意味から連想されることを、思想・歴史・文学の諸領域の著述の中から紹介し、読者の思考を広げる手引きとしている。末尾に「孔子の生き方」「備前・備中に儒学が根付いたのは」という解説を付す。またもう一部の付録冊子『論語かるた 絵札作者の思い』には絵画制作者6名によって制作の意図が綴られている。『論語』の言葉のテーマを美術的に表現した芸術家の繊細な感性をうかがうことができる。



取り札 B面

取り札 A面

読み札

E『論語かるた』（佐久協 監修・執筆、宝島社、2009年、1200円）

訓読した『論語』の章句を五十音に従って44句収録している。いわゆる「いろはがかるた式」の形式で、読み札には章句全体の文言を記し、取り札は、A面に章句の白文とそれを読み下しにした冒頭の仮名1字のみを記す（「学びて時に之を習う」の章句なら取り札に「ま」と記す。）Bと同様に年齢の低い幼時でも遊べる。章句の意味は、取り札のB面に、直訳ではないわかりやすい表現で記す。取り札には、章句の意味を現代生活に引き当てた絵が、コミカルなマンガ風に描かれる。一枚物の付録「2000年以上前の中国から伝わる『論語』の世界」は、『論語』や孔子について解説する。



取り札 B面

取り札 A面

読み札

2. 手作り『論語』カルタ

最後に、一定期間、音読を繰り返す学習活動に意欲を持続させ、より自主的な取り組みを促す方法として、副教材を基に作成した『『論語』カルタ』の利用を提案する。

読み札・取り札の作成 音読の学習活動は細切れの時間を使うことを想定しているので、手作りカルタも時間をかけず簡単に作ることでできるシンプルなものとする。まず、読み札は作らなくてもよい。副教材を余分に印刷しておき、カルタ遊びに際して、章句別に切ってバラした

シートを読み札代わりに使えば用は足りる。取り札には、副教材の〈本文〉の傍線部だけを記し、「百人一首式」のカルタとする。取り札にする厚紙に、後で消せるように鉛筆で罫線のみ引いておき、傍線部の文言の書き入れは生徒に分担させる。「みんながゲームで使うものなので、誰もが分かるように丁寧に明瞭に書くように」と指示すれば、書写の練習にもなる。『論語』の章句の内容を絵画で表すのはなかなか難しいので、絵はなくてもよい。

遊び方 遊び方は人数・時間等に応じて適宜考えればよいが、例えばクラスで1コマ50分を用いてカルタ大会を開く場合、仮に1クラス40名として、1チーム5名で8チーム、50分間に2回の対戦が十分可能である。カルタを2組み作成しておけば、4チームの組が2組同时对戦できる。

各チームから〈札の取り手〉が1人ずつ出て4人で札を取り合い、札を取り終わる毎に各チームとも取り手を交代し、全員に7～8回順番が回るようにする。1回目の対戦を予選とし、取った札数の多い各組の上位2チームが決勝戦へ進出とする。2回目が決勝戦で、予選を勝ち上がった上位4チームで対戦し、取った札数に応じて順位を決める。同時にもう1組のカルタを使って、予選落ちの4チームで5位以下の順位決定戦をしてもよい。もし時間的に3回の対戦が可能であれば、決勝戦の前に、予選落ちの4チームで敗者復活戦を行い、そこでトップの1チームを決勝戦に進ませるなどしてもよい。負けチームの生徒に札の読み上げ役を分担させれば、生徒を退屈させず音読の練習にもなる。

読み上げ方 手作り『論語』カルタは、副教材の〈本文〉の一部傍線部のみが取り札に書かれた「百人一首式」である。よって〈本文〉を覚えていれば、全文を読み上げる前に札を取ることができる。それを考慮に入れ、読み上げの際には、〈本文〉を傍線部の前までできるだけ停顿なくスラリと読み、一息間を置いて、傍線部をゆっくり読み上げるように心掛ける。傍線部は二度読み上げるようにする。

結びにかえて

以上、『論語』を材料とする副教材で音読学習を行い、その動機づけとしての手作り『論語』カルタの利用について紹介した。最後に、念のために述べるが、『論語』を取り上げるのは、もちろん内容が教育的に有用と考えるからだだが、同時に、時間的・技術的に取り上げやすいという面も大きい。よって、『論語』だけを取り上げればよい、と考えるのでは決してない。漢詩・故事成語・史伝など、大体的内容を把握した既習の教材の一部を、後掲の副教材に取り込んで音読することを拒むものではない。むしろ手作りカルタに既習の「国破れて山河在り、城春にして草木深し。」「春眠曉を覚えず、処処啼鳥を聞く。」「頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思う。」(ともに傍線部は下の句)など漢詩の名句を織り交ぜて「手作り漢詩漢文カルタ」にすればよりよいと考える。

本稿で示した方法は、新『指導要領』が公示された平成20年度以降、小学校・中学校の教員を対象とした研修会などで何度か紹介し、その有効性や運用可能性について一定の賛同や評価を得てきた。今回その内容を一般に公開して大方のご教示を仰ぎ、今後の改善を図りたい。

《付録1》朗読のための『論語』副教材

一、学（學）一学ぶこと一

- ① 子曰はく、「^{い(わ)}学^びて^{これ}時^に之^を習^ふ、亦^た ^(う)説^ばし^{から}ず^や。……」と。

子曰^{ハク}、学^{ビテ}而^{シテ}時^ニ習^フ之^ヲ、不^レ亦^タ説^{バシカラ}乎^ト。(学而篇第一)

先生はおっしゃった、「新しいことを知って、事あるごとにそれを繰り返して身につけることは、なんとなくうれしいことではないか（そうじゃないかね）。」と。

◎ 「学習」のルーツ。繰り返して身に付くことは楽しい。

【言葉の説明】○子…「こども」ではなく、「先生」の意味。○学びて…新しい知識を得ること。○時に…いつも、事あるごとに。「時たま」ではない。○亦た～ずや…なんと～ではないか、そうだろう、と感動を相手に伝える言い方。

※この後に、⑩・⑦の2句が続く。『論語』の中で最も大事な章なので、三つ合わせて覚えよう。

- ② 子曰はく、「^(わ)吾^{われ}十^{じゅう}有^{ゆう}五^ごにして^こ学^に志^す。三十にして^{たつ}立^つ。

^し四十にして^{まど(わ)}惑^{はず}。五十にして^{てんめい}天命を知る。…」と。

子曰^{ハク}、吾^{ニシテ}十^{ニシテ}有^{ニシテ}五^{ニシテ}而^{シテ}志^ス于^ニ学^ニ。三十^{ニシテ}而^{シテ}立^ツ。四十^{ニシテ}而^{シテ}不^レ惑^ハ。五十^{ニシテ}而^{シテ}知^ル天^ニ命^ヲ。(為政篇第二)

先生はおっしゃった、「私は十五歳で学者として生きる決意をした。三十歳で一人立ちした。四十歳で自分の生き方に迷いがなくなった。五十歳で天が与えた使命（生きる意味）を悟った。……」と。

◎ みんなは将来、何に志して、どのような人生を歩むのかな。

【言葉の説明】○十有五…十プラス五の意味。○立つ…社会人として一人前になる。○天命…天が自分に与えた命令・使命。自分が生きる意味。

- ③ 子曰はく、「^(わ)学^びて^(わ)思^はざ^らば、則^ち ^(い)罔^し。思^ひて^(い)学^ばざ^らば、則^ち ^{あやふ}殆^し。」と。

子曰^{ハク}、学^{ビテ}而^{シテ}不^レ思^ハ、則^チ罔^シ。思^{ビテ}而^{シテ}不^レ学^バ、則^チ殆^{シト}。(為政篇第二)

先生はおっしゃった、「学んで知識を得ても、自分の頭で考えなければ、〔単なる物知りで、〕せっかくの知識も活かせない。逆に、考えるばかりで、知識を得なければ、〔一人よがりで、〕危なっかしい。」と。

◎ 知識・情報を得ること、よく考えること、両方のバランスが大切。

【言葉の説明】○罔し…「くら-し」と読む。ぼんやりとして、理解が十分でない。あやふやで、活用できない。○殆し…「あやふ-し」と読む。独りよがりで、危険、不安だ。

- ④ 子曰はく、「古^(わ)の^{おのれ}学^は者^は己^のの^{ため}に^し、今^(わ)の^{おのれ}学^は者^は人^のの^{ため}に^す。」と。

子曰^{ハク}、古^ノ之^ノ学^ハ者^ハ己^ニス、今^ノ之^ノ学^ハ者^ハ人^ニス。(憲問篇第十四)

先生はおっしゃった、「昔の学ぶ人々は自分の向上のために学んだが、〔残念ながら〕今の学ぶ人々は他人から褒められるために学んでいる。」と。

◎ 学習は自分の人格・能力の向上のためにする行為。

【言葉の説明】○学者…広く「学ぶ人」一般を言う。今の学者のあり方を嘆いた言葉。○人の為にす…他人の評価（賞賛・出世）のために学ぶ。「人々の幸福のため」という意味ではない。

⑤ 子曰はく、「^(わ)之を知る者は、^(これ)之を好む者に如かず。之を好む者は、^(し)之を楽しむ者に如かず。」と。

子曰ハク、知^ル之^ヲ者ハ、不^レ如^カ好^ム之^ヲ者ニ。好^ム之^ヲ者ハ、不^レ如^カ樂^{シム}之^ヲ者ニ。

(雍也篇第六)

先生はおっしゃった、「ものごとを知っている人は、それが好きな人にはかなわない。

それを好きな人は、それを楽しむ人にはかなわない。」と。

◎よく知っていること、好きなこと、楽しめることに何がある？

【言葉の説明】○～に如かず…およばない、かなわない。「百聞は一見に如かず」と同じ。

二、意志・行動—継続の大切さ—

⑥ 子曰はく、「^(わ)故きを温めて^(ふる)新しきを知れば、^(もつ)以て師と^(し)為るべし。」と

子曰ハク、温^{メテ}故^{キヲ}而知^{レバ}新^{シキヲ}、可^{シト}以^テ為^ル師ト矣。(為政篇第二)

先生はおっしゃった、「昔のことを学習して、そこから今に生かせる意味を見つけられれば、人々に教える先生になることができる。」と。

◎ 昔のもの（道具・書物など）につまった知恵を今に生かそう。

【言葉の説明】○故き…古いこと、昔の人の知恵、古典など。○温めて…冷えた食物を温め直すように、古いことを学んで理解する。○新しきを知る…今に活用できる意味を見つける。

⑦ 人知らずして^(わ)愠まず、^(うら)亦た君子ならずや。

人不^{シテ}知^ラ不^レ愠マ、不^レ亦^タ君子ナラ^ヤ乎。(学而篇第一)

他人が分かってくれないといって不満に思わない人は、なんと立派な人物ではないか（そうだろう）。

◎ 他人が認めてくれるかどうかは、自分の出来ることの外にある。

【言葉の説明】①・⑥の続き。○人知らずして…他人が自分のことを認めてくれない、評価してくれない。○愠む…心の中で不満をくすぶらせること。○君子…知識と仁徳とを身につけた立派な人。孔子の学校は、君子になることを目標とした。

※他人が評価してくれるかどうかではなく、自分が何をすべきか、何ができるかを考える。

⑧ 子川の上に在りて曰はく、「^(わ)逝く者は^(ゆ)斯くの如きか。昼夜を^(か)舍かず。」と。

子在^{リテ}川^ノ上^ニ曰^{ハク}、逝^ク者^ハ如^キ斯^{クノ}夫、不^レ舍^カ晝夜^ヲ。(子罕篇第九)

先生は川岸に立っておっしゃった、「やすみなく努力する人は、ちょうどこの川の流れるようだなあ。昼も夜も止まることがない。」と。

◎ 「継続は力なり。」（ことわざ）

【言葉の説明】○川の上…川のほとり。「かわかみ」ではない。○斯くの如きか…「斯」は「此

(これ)」の意味。「こうなんだなあ」と感心した言い方。○昼夜を舍かず…「舍」は、「やめる」「とどまる」。昼も夜もやすむことがない。

- ⑨ 子曰はく、「力足らざる者は、中道にして廢す。今女は畫せり。」と。

子曰ハク、力不_レ足_ラ者ハ、中道_ニシテ而_テ廢ス。今女ハ畫セリト。(雍也篇第六)

先生はおっしゃった、「力が足りないものは、途中で倒れてしまうものだ。今、お前は自分で自分を見限っているのだ。」と。

- ◎ 自分の能力は、継続してみても分かる。自分で自分に限界をつけるものではない。

【言葉の説明】○冉求…孔子の弟子。優れた弟子の一人だが、消極的な面があった。冉求は「私には先生の教えを学ぶ力が足りない」と弱音を吐いた。そんな冉求を励ました言葉。○画…絵画を描くように線引きをする。「自分の力はこれまでだ」と自ら限界を引くこと。

- ⑩ 子曰はく、「譬へば山を為るが如し。未だ一簣を成さざるも、止むは吾が止むなり。」と。

子曰ハク、譬_ヘバ如_シレ為_ルガ山ヲ。未_ダ一簣_ヲ成_サズ、止_ムハ吾_ガ止_ムナリト。(子罕篇第九)

先生はおっしゃった、「たとえば山をつくるような場合。たとえ一かご分を成し遂げなかっただけでも、その停止は自分が止めたのだ。」と。

- ◎ 「遅いことは怖くない、立ち止まることが怖い」(中国のことわざ「不怕慢、只怕站」)

【言葉の説明】○未だ～ざるも…まだ～していなくても。○一簣…「簣」は土を盛って運ぶかご。○地を平らかにする…穴を土で埋めて平らにする。○一簣を覆す…一籠の土をかぶせる。

三、孝・悌—身近な人々への愛・敬い—

- ⑪ 子曰はく、「弟子入りては則ち孝、出でては則ち悌。謹しみて信あり、汎く衆を愛して仁に親しめ。」と。

子曰ハク、弟子入_リテハ則_チ孝、出_デテハ則_チ悌、謹_シミテ而_テ信_{アリ}、汎_ク愛_シテ衆_ヲ而_テ親_シム仁_ニ。

(学而篇第一)

先生はおっしゃった、「若者は、家庭に入れば父母に孝行し、家庭を出れば目上を敬いなさい。慎重に行動して信頼され、ひろく人々を愛し、すぐれた人に親しみ見習いなさい。」と。

- ◎ まずは両親・親戚・近所など身近な人への敬愛から。

【言葉の説明】○弟子…「ていし」と読んで、若者の意味。○孝…父母を大切に思う気持ち、愛情、その気持ちで行う行為。○悌…目上の人への敬意、それに基づく行為。○信…人+言=信(人の言葉=まこと・信頼)。○汎愛衆…人を仲間はずれにしたり、他のグループといがみ合ったらせぬこと。○仁に親しむ…仁者(他人思いの立派な人)に近づき見習うこと。

- ⑫ 孟武伯孝を問ふ。子曰はく、「父母は唯だ其の疾をのみ之憂ふ。」と。

孟武伯問_フ孝ヲ。子曰ハク、父母_ハ唯_ダ其_ノ疾_ヲノミ之_ヲ憂_フト。(為政篇第二)

孟武伯が孝行とは何かとたずねた。先生はおっしゃった、「父母というものは、わ

が子の病気をひたすら心配するものですよ。[心配をかけてはいけません。]と。

◎ 生命は自分だけのものではない。親は子の健康を何より心配している。

【言葉の説明】○孟武伯…魯の国の貴族。贅沢で不規則な暮らしをしていたという。○唯～をのみ…ただ～だけをひたすら。

- ⑬ 子曰はく、「今の孝は、是能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで、皆能く養ふこと有り。敬せずば、何を以て別たんや。」と。

子曰^{ハク}、今之孝者、是謂^ハ能^ク養^フ。至^{ルマデ}於^ニ犬馬^ニ、皆能^ク有^リ養^{フコト}。不^{ズンバ}レ敬^セ、何^ヲ以^テ別^{タン}乎^ト。(為政篇第二)

先生はおっしゃった、「今の親孝行とは、親の身の回りのお世話をするをいう。[しかし、身の回りの世話ということならば、人は]犬や馬の世話だってする。敬意感謝する気持ちがなければ、[親と犬・馬とを]どうやって区別するのか。」と。

◎ 親には、感謝と敬いの気持ちで、自分のできる手伝いをしよう。

【言葉の説明】○能く養ふ…「能く」は、～できるの意味。「養う」は、老いた両親の生活の世話をする(食事、健康管理、手伝いなど)。○～ずんば…～しなかったならば。○何を以て～や…どのようにして～するのか。

- ⑭ 子曰はく、「父母在せば、遠く遊ばず。遊ぶに必ず方有り。」と。

子曰^{ハク}、父母在^{セバ}、不^ズ遠^ク遊^バ。遊^{ブニ}必^ズ有^{リト}方^ハ。(里仁篇第四)

先生はおっしゃった、「父母が元気でいらっしゃる時には、子供は遠くへの旅はできるだけしないように。遠くへでかける時には、必ず行き先を決めておくことだ。」と。

◎ いつも子の無事を願っている両親に、心配をかけないように。

【言葉の説明】○在す…「在り」の尊敬語。元気でいらっしゃる。○遊ぶ…遠くへ出かける。近世以前、旅は時間がかかり、危険が多く、命がけだった。○方…方角。決まった行き先。

- ⑮ 子曰はく、「父母の年は、知らざるべからず。一には則ち以て喜び、一には則ち以て懼る。」と。

子曰^{ハク}、父母之年^ハ、不^レ可^{カラ}不^レ知^ラ也。一^{ニハ}則^チ以^テ喜^ビ、一^{ニハ}則^チ以^テ懼^{ルト}。

(里仁篇第四)

先生はおっしゃった、「父母の年齢は知っていなければいけない。一つには、まだお元気だと喜ぶために。もう一つには、年をとって衰えるのを心配するために。」と。

◎ 元気な人も必ず老いてゆきます。長く健康でいてほしいですね。

【言葉の説明】○知らざるべからず…知っていなければならない、の意味。

四、朋友一友だちとともに一

- ⑯ 朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや。

有^リ朋^自遠^方来^{タル}、不^ズ亦^タ樂^{シカラ}乎^ヤ。(学而篇第一)

〔子曰はく、学びて時に…の続き〕友だちが遠くから訪ねてきてくれるのは、なんと楽しいことではないか（そうだろう）。

◎ 遠くからわざわざ訪ねて来てくれる仲間がいる幸せ。

【言葉の説明】①「子曰はく、学びて時に…」の続き。○朋…友人。特に、知識・技術を学んで目標や喜びを共有する仲間のこと。

- ⑪ 曾子曰はく、「吾日に吾が身を三省す。人の為に謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。習はざるを伝へしか。」と。

曾子曰ハク、吾日ニ三ニ省ス吾ガ身ヲ。為ニ人ノ謀リテ而不ル忠ナラ乎。與ニ朋友ニ交ハリテ而不ル信ナラ乎。傳ヘシレ不ルヲ習ハ乎ト。(学而篇第一)

曾先生がおっしゃった、「私は毎日何度もくりかえし我が身を反省している。人の相談にのって誠実でなかったのではないか。仲間づきあいで、うそをついて信頼を失わなかったか。十分に身に付いていないことを伝えなかったか。」と。

◎ 他人・友人・仕事に真心・誠実を尽くしているか。

【言葉の説明】○曾子…孔子の弟子の一人。親孝行で、謙虚、他人への思いやりに厚い人。○三省…何度もくりかえし反省する、の意味。○謀…相談にのる、アドバイスする。○忠ならざるか…「忠」は、まごころ、誠実さ、の意味。

- ⑫ 子路曰はく、「願はくは子の志を聞かん。」と。

子曰はく、「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん。」と。

子路曰ハク、願ハクハ聞カンニ子之志ヲ。子曰ハク、老者ハ安ンジレ之ヲ、朋友ハ信ジレ之ヲ、少者ハ懐ケントレ之ヲ。(公冶長篇第五)

(孔子と弟子たちが、それぞれの目標を述べ合った時の言葉。) 子路さんが言った、「どうか先生の目標を聞かせてください。」と。先生はおっしゃった、「老人には安心していただき、仲間には信頼され、若者には慕わりたいものだ。」と。

◎ 地味だが、実際に行くには難しい志(目標)ですね。

【言葉の説明】○子路…孔子の優れた弟子の一人。弟子の中では年長で、率直で勇敢な人柄。

- ⑬ 曾子曰はく、「君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。」と。

曾子曰ハク、君子ハ以テ文ヲ會シレ友ヲ、以テ友ヲ輔クトレ仁ヲ。(顔淵篇第十二)

曾先生がおっしゃった、「立派な人は、学問をすることで仲間と集い、共通の志をもった仲間と付き合うことで、仁に生きること(人間らしく生きること)を支え合う。」と。

◎ 一人ではくじけそうなことも、助け合う仲間があれば成し遂げられそうです。

【言葉の説明】○曾子…孔子の優れた弟子の一人。⑪を参照。○文を以て…「文」は、孔子の学校で教えた学問。「以て」は、～を使って、～を用いて。○仁を輔く…「仁」は、広く人々を思いやり愛する、人間らしい心。孔子が最高の目標に掲げた心のあり方。

- ②⑩ 孔子曰はく、「益者三友、損者三友。直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。」と。

孔子曰^{ハク}、益者三友、損者三友。友^{トシ}直^{キヲ}、友^{トシ}諒^ヲ、友^{トスルハ}多聞^ヲ、益^{ナリト}矣。
(季氏篇第十六)

孔先生がおっしゃった、「自分を成長させてくれる三種類の友だちがあり、逆に自分をだめにする三種類の友だちがある。正直者を友とし、まごころのある人を友とし、知識の広い人を友とするのは、自分の成長のためになる。」と。

- ◎ 心が真直ぐで、親身で、いろんなことを知っているいい仲間。

【言葉の説明】○益者三友、損者三友…自分に有益な、自分を高めてくれる三種の友人。逆に、自分には損になる、自分をだめにする三種の友人。○諒…「諒」は、誠実・まごころの意味。

※続く「損者三友」として、「便辟（人当たりは良いが率直でない人）を友とし、善柔（表面は善人だが腹黒い人）を友とし、便佞（話上手で人にこびる人）を友とするは、損なり」とある。

五 仁一人他人や人類全体への思いやり・愛情について

- ②⑪ 子曰はく、「其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」と。

子曰^{ハク}、其^レ恕^カ乎。己^ノ所^レ不^レ欲^セ、勿^{カレト}施^{スコト}於^ニ人^ニ。（衛霊公篇第十五）

〔弟子の子貢の「一生実践する値打ちのある一言が有りますか。」との質問に対して、〕先生はおっしゃった、「それは恕（思いやり）だろうね。〔たとえば〕自分がされて嫌なことは、他人にしてはいけない。』と。

- ◎ 恕（思いやり）とは、自分の思いを他人に向ける想像力。

【言葉の説明】○子貢…孔子の優れた弟子の一人。頭の回転が早く、議論も得意なマルチ人間。（知の人）○恕…他人への思いやり（想像力）。「思いやり」とは「思い遣り（自分の思いを他に遣ること）」。

○己の欲せざる所、人に施すこと勿れ…自分の嫌なことは、他人も嫌だろうと想像力を働かせて、他人に行わないように。「勿かれ」は禁止の意味。

- ②⑫ 子曰はく、「仁は遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る。」と。

子曰^{ハク}、仁^ハ遠^{カラ}ン乎哉。我^ガ欲^{スレバ}仁^ヲ、斯^ニ仁^至ル矣。（述而篇第七）

先生はおっしゃった、「仁（人間らしい心）は遠くにあるものだろうか（いや違う）。

私が仁を望みさえすれば、すぐに仁は自分のところにやってくる。」と。

- ◎ 仁の心は尊いが難しくはない。他人を思いやる自覚さえ持てば。

【言葉の説明】○遠からんや…「遠いだろうか」と問う形（疑問形）で、実は「決して遠くない」ことを強めた言い方（反語）。

- ②⑬ 顔淵 仁を問ふ。子曰はく、「克己復礼を仁と為す。……仁を為すは己に由る。而して人に由らんや。」と。

顔淵問^フ仁^ヲ。子曰^{ハク}、克^キ己^ニ復^フ禮^ヲ為^ス仁^ト。……為^{スハ}仁^ヲ由^ル己^ニ。而^{シテ}由^{ラン}人^ニ

乎哉^やト。(顔淵篇第十二)

顔淵さんが仁について質問した。先生はおっしゃった、「わがままを抑えて（＝克己）社会のルールに従うことが（＝復礼）、仁（人間らしい心）に向かう方法だ。仁を行うのは自分だ。他人がしてくれるのではない。」と。

◎ 人のためになる行いは、自分からすすんで始めることが大切。

【言葉の説明】○顔淵…孔子が最も高く評価した弟子（仁の人）。○克己…己（自分）の勝手気ままな心に打ち克つこと。わがままを抑えること。○復礼…礼（社会のマナー・ルール）に従うこと。○人に由らんや…仁の実践は他人の力によるのではない。

②④ 子曰^(わ)はく、「巧言^{こうげん}令^{れい}色^{しよく}、鮮^{すくな}し仁。／剛毅^{こうき}木訥^{ぼく}、仁^にに近^きし。」と。

子曰^{ハク}、巧言令色、鮮^シ矣仁^ト。(学而篇第一・陽貨篇第十七)

子曰^{ハク}、剛毅木訥、近^{シト}レ仁^ニ。(子路篇第十三)

先生はおっしゃった、「おべんちゃら、作り笑顔は、〔見かけとは逆に〕仁（思いやり）に欠けている。／強い意志、素朴で素直な態度は、〔見かけとは逆に〕仁のあり方に近い。」と。

◎ 他人に気に入られようとするのではなく、真心・誠実を尽くすことが大切。

【言葉の説明】○巧言令色…「巧言」は、口先だけの巧みな言葉。「令色」は、見せかけだけの良い表情。ともに相手に気に入られようとする態度。○剛毅木訥…「剛毅」は、揺るがない心の強さ。「木訥」は、話しぶりが飾らず、ありのまま。ともに、真心を素直に表す態度。

②⑤ 子曰^(わ)はく、「知者^{ちしや}は惑^{まど}はず。仁者^{じんしや}は憂^{うれ}へず。勇者^{ゆうしや}は懼^{おそ}れず。」と。

子曰^{ハク}、知者^ハ不^レ惑^ハ。仁者^ハ不^レ憂^ハ。勇者^ハ不^トレ懼^レ。(子罕篇第九)

先生はおっしゃった、「知恵のある人は迷いがない。思いやりのある人は不安や心配がない。勇気のある人は恐がない。」と。

◎ 仁者はなぜ憂えないのでしょうか。

【言葉の説明】○仁者は憂へず…「仁者」は、他人への思いやりのある人。仏教の「慈悲」、キリスト教の「博愛」と同じで、他者への思いやりに生きると、こだわりから解放され、安らかな幸福感が得られる。

六、君子—すぐれた人とは—

②⑥ 子曰^(わ)はく、「君子^わは和^{どう}して同^{どう}ぜず、小人^{しょうじん}は同じて和^{どう}ぜず。」と。

子曰^{ハク}、君子^ハ和^{シテ}而不^レ同^ゼ、小人^ハ同^{ジテ}而不^トレ和^セ。(子路篇第十三)

先生はおっしゃった、「君子（立派な人物）は、みんなと仲良く調和できるが、まわりに調子を合わせることではない。〔それとは逆に〕小人（つまらない人）は、まわりに調子を合わせるばかりで、本当に人と仲良く調和することができない。」と。

◎ 「和」とは、自分の持ち味を生かしながら、周りと調和すること。

【言葉の説明】○君子…「君子」は、元々は人の上に立つ君主、リーダー。そこから、「リーダー

にふさわしい知・徳を備えた立派な人」の意になった。「小人」はその反対。○和して同ぜず…「和」は自分の持ち味を活かしながら、全体で調和している状態。「合唱・合奏(和音)」「料理」のイメージ。「同」は、自分の考えや意見をもたず、相手や周囲の人々に同調すること。

②⑦ 子曰^(わ)はく、「君子は人の美^びを成^なし、人の悪^{あく}を成さず。小人は是^{これ}に反す。」と。

子曰^{ハク}、君子^ノ成^シ人之美^ヲ、不^レ成^サ人之美^ヲ。小人^ハ反^{スト}是^ニ。(顔淵篇第十二)

先生はおっしゃった、「君子は、人の長所を伸ばすのを手伝うが、人の短所がひどくなる手伝いはしない。小人はそれと反対のことをする。」

◎ 他人の長所を見つけ、教えてあげると、元気が出てもっと長所が伸びます。

②⑧ 子曰^(わ)はく、「君子は諸^{これ}を己^{おのれ}に求め、小人は諸を人に求む。」と。

子曰^{ハク}、君子^ノ求^メ諸^ヲ己^ニ、小人^ハ求^ム諸^ヲ人^ニ。(衛霊公篇第十五)

先生はおっしゃった、「君子は、自分に責任・原因があるのではないかと反省し、小人は他人に責任・原因を押しつける。」

◎ 自分がなすべきことをしているか、まず自分に目を向けよう。

②⑨ 子曰^(わ)はく、「君子は義^ぎに喩^より、小人は利^りに喩る。」と。

子曰^{ハク}、君子^ノ喩^リ於義^ニ、小人^ハ喩^ル於利^ニ。(里仁篇第四)

先生はおっしゃった、「君子は自分が何をすべきか(すべきでないか)に敏感だが、小人は自分にとって何が得^{とく}か(損^{そん}か)に敏感だ。」と。

◎ 利益(得)を前にして、「それが正しいかどうか」をまず考えるのが君子。

【言葉の説明】○義…世間・社会で正しいと考えられていること。人類一般・時代的あるいは地域的な慣習・政治体制など、いろいろなレベルで正しいことがあり、もとになる人間の社会が変われば、義もかわる。○喩る…明らかにわかる、はっきりと知る、感覚が優れる、敏感。

③⑩ 子貢曰^(わ)はく、「君子の過^{あやま}つや、日月の食^{じつげつ}するが如し。

過^{あやま}つや人皆^{みなこれ}之^をを見、更^{あらた}むるや人皆^{みなこれ}之^をを仰^{あお}ぐ。」と。

子貢曰^{ハク}、君子之過^{ツヤ}也、如^シ日月之食^{スルガ}焉。過^{ツヤ}也人皆見^レ之^ヲ、更^{ムルヤ}也人皆仰^グ之^ヲ。(子張篇第十九)

子貢さんは言った、「君子の過ちは、ちょうど日食や月食と同じだ。〔月日は欠けるのを誰にも隠さないように〕君子は過ちを隠さず、人々はそれを見る。〔また、月日が元に戻るのを誰もが仰ぎ見るように〕過ちを悔い改めるのを見て、人々は君子を尊敬する。」

◎ 過失は隠してはいけない。過ちを改めて、繰り返さないならば、過失ではない。

【言葉の説明】○子貢…孔子の優れた弟子の一人。②⑦を参照。○日月の食するが如し…「日月の食する」は、日食や月食のように、月日が欠けること。君子の過ち・失敗を太陽・月が欠ける様子に喩^{たと}えた。他に「過ちて改めざる、是を過ちと謂う。」(衛霊公篇)という言葉もある。

《付録2》各種『論語』カルタ所収章句一覧

- ・ この表は、市販されている各種『論語』カルタ、および小学校・中学校「国語」教科書等のが収める『論語』の章句の一覧である。
- ・ 「句」の欄には、紙幅の関係で「子曰く」等を省き、書き下し文のみを挙げた。各種カルタおよび教科書の『論語』章句の訓読は一致しない場合もある。ここでは江戸時代からの典型的な読みかたを伝える金谷治訳注『論語』（岩波文庫）の書き下し文を掲げた（ただし歴史的仮名遣いに改めた）。
- ・ 「篇章」は、朱熹『論語集注』の分章に拠った。例えば11-1は、先進篇第十一の第一章に見える句の意味である。『論語』の分章はテキストにより若干違いがあるので、この「篇章」によって各種『論語』訳注を参照する場合、見当たらなければその前後も見られたい。
- ・ 同じ篇章にある句でも、各種カルタ・教科書などで異なる部分を取り上げている場合は、「句」を別枠とした。
- ・ 同じ句を取り上げていても、各種カルタ・教科書等で取り上げ方に長短・多寡の違いのあるものは、取り上げ方が分かるように区別して掲げ、句末に（ ）で所収のカルタ・教科書等を注記した。
- ・ A～G欄に各種カルタ・教科書等の収録状況を示す。それぞれの記号の示す資料は次の通り。
 - A『百人一首式 論語カルタ』（公益法人「孔子の里」〈佐賀県多久市〉、2001年）
 - B『論語いろはカルタ』（公益法人「孔子の里」〈佐賀県多久市〉、2000年）
 - C『あしかが 論語名句選かるた』（足利商工会議所〈栃木県足利市〉、2010年）
 - D『論語かるた』（備前商工会議所〈岡山県備前市〉、2011年）
 - E『論語かるた』（宝島社、2009年）
 - F 各社小学校国語教科書、および世田谷区教育委員会編『日本語』（☆）
 - G 各社中学校国語教科書
- ・ 各種資料の収録状況に関して、Aが収めている章句にはA欄に○を付し、B・C・Eには仮名のどの字として採用したかがわかるようにそれぞれの欄に仮名で示した。Dは章句の内容を代表する漢字1字を読み札に記すので、D欄にその漢字1字で示した。
- ・ F欄とG欄には、当該章句を収録した教科書の出版社と配当学年とを、略称とアラビア数字で示した。各出版社の略称は次の通り。
 - 光村図書＝光村、東京書籍＝東書、教育出版＝教出、三省堂＝三省、学校図書＝学図、世田谷区教育委員会編『日本語』＝☆
- ・ Fに挙げた教科書間で収録・未収録が分かれる場合は、収録した章句の下に出版社名を「F 光村」のように記した。単にFとのみ示す場合は、F欄に挙げた教科書間に収録状況の差がないことを示す。

章句	篇章	A	B	C	D	E	F	G
学びて時にこれを習ふ、亦た説ばしからずや。 (A・B・C・D・E) 学びて時にこれを習ふ、亦た説ばしからずや。 朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや。(F) 学びて時にこれを習ふ、亦た説ばしからずや。 朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや。 人知らずして慍みず、亦た君子ならずや。(G)	1 - 1	○	ま	ま	悦	ま	教出5 三省6 ☆1	教出2 三省3
朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや。		○	と		楽	と		
本立ちて道生ず。孝弟なる者は其れ仁の本たる か。(C) 本立ちて道生ず。(E)	1 - 2			も		も		
巧言令色、鮮し仁。 すくな	1 - 3 17 - 17	○	こ	こ	鮮		☆3	
吾れ日に三たび吾が身を省る。 (A・B・D・F三省) 吾れ日に三たび吾が身を省る。人の為に謀りて 忠ならざるか、朋友と交はりて信ならざるか、 習はざるを伝ふるか。(F☆)	1 - 4	○	わ		省		三省6 ☆5	
朋友と交はりて信ならざるか。				ほ	信			
習はざるを伝ふるか。				な	伝			
過てば則ち改むるに憚ること勿かれ。	1 - 8 9 - 24	○		あ		あ		
終はりを慎しみ遠きを追ふ。	1 - 9	○	を					
礼の用は、和を貴しと為す。	1 - 12			れ	和			
切磋琢磨。	1 - 15					せ		
人の己れを知らざるを患へず、人を知らざることを患ふ。	1 - 16			ひ			☆3	
詩三百、一言以てこれを蔽う、曰はく、思ひ邪 なし。(F) 思ひ邪なし。(D)	2 - 2				邪		☆4	
恥有りて且つ ただ 格し。	2 - 3					は		
吾れ十有五にして学に志す。(A・D・E) 吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。 四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六 十にして耳順がふ。七十にして心の欲する所に 従ひて、矩を踰えず。(F・G)	2 - 4	○			学	し	教出5 ☆5	三省1 学図2
ふる故きを温めて新しきを知る。 (A・B・C・D・F教出) 故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべ し。(F東書・三省・☆)	2 - 11	○	ふ	ふ	新		教出5 東書6 三省6 ☆5	

君子は器ならず。	2 - 12	○	く			く		
先づ其の言を行なひ、而して後にこれに従ふ。	2 - 13	○						
学んで思はざれば則ち罔し。思ふて学ばざれば 則ち殆し。(F・G) 学んで思はざれば則ち罔し。(D) 思ふて学ばざれば則ち殆し。(A・B・C)	2 - 15	○	お	お	罔		光村 5 ☆ 4	学図 2
これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。(A) 由よ、女にこれを知るを誨へんか。これを知る をこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。 (F・G)	2 - 17	○					☆ 6	学図 2
兄弟に友に。	2 - 21					け		
義を見て為ざるは、勇なきなり。	2 - 24	○	き		勇	き		
絵の事は素を後にす。	3 - 8	○	ゑ					
罪を天に獲れば、禱る所なきなり。	3 - 13	○						
楽しみて淫せず、哀しみて傷らず。	3 - 20	○						
既往は咎めず。	3 - 21			き				
仁に志せば、悪しきこと無し。	4 - 4	○			悪			
君子は食を終ふるの間も仁に違ふこと無し。	4 - 5	○						
朝に道を聞きては、夕べに死すとも可なり。	4 - 8	○	あ					
君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ。	4 - 11	○						
利に放りて行なへば、怨み多し。	4 - 12	○	り	り	怨	り		
能く礼讓を以て国を為めんか、何か有らん。	4 - 13				国			
位なきことを患へず、立つ所以を思ふ。	4 - 14	○						
吾が道は一以てこれを貫く。	4 - 15	○			一			
夫子の道は忠恕のみ。		○			忠			
君子は義に喩り、小人は利に喩る。	4 - 16	○	く				☆ 5	
賢を見ては斉しからんことを思ふ。	4 - 17	○	け	け				
勞して怨みず。	4 - 18	○	ろ					
	20 - 2							
父母の年は、知らざるべからず。	4 - 21					ふ		
古者言をこれ出さざるは、躬の速ばざるを恥じてなり。	4 - 22			い				
約を以てこれを失する者は、鮮し。	4 - 23	○	や			や		
君子は言に訥にして行ひに敏ならんと欲す。	4 - 24	○						
徳は孤ならず。必ず鄰有り。	4 - 25	○			隣		☆ 2	教出 2
朋友に数すれば、斯に疏んぜらる。	4 - 26	○	ほ					
一を聞きて以て十を知る。	5 - 9					い	東書 6	
朽木は彫るべからず。	5 - 10				彫			
敏にして学を好み、下問を恥ぢず。	5 - 15	○			下			

善く人と交はる。久しくしてこれを敬す。	5 - 17	○				よ		
斐然として章を成す。	5 - 22				章			
老者はこれを安じ、朋友はこれを信じ、少者はこれを懐けん。(C)	5 - 26			ろ		ろ		
老者はこれを安んず。(E)								
已んぬるかな。吾れ未だ能く其の過ちを見て内に自ら訟むる者を見ざるなり。	5 - 27			や				
怒りを遷さず。	6 - 3	○						
力足らざる者は、中道にして廃す。	6 - 11	○						
今女は画れり。					画			
行くに徑に由らず。	6 - 13	○		ゆ	徑	ゆ		
人の生くるは直し。	6 - 18					ひ		
これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。(A)		○					☆6	
これを知る者は之を好む者に如かず。これを楽しむ者はこれを楽しむ者に如かず。(C)	6 - 19							
仁者は難きを先にして獲るを後にす。(D)	6 - 21			か	獲			
難きを先にして獲るを後にす。(C)								
知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。	6 - 22	○						
中庸の徳為るや、其れ至れるかな。	6 - 28	○			至			
述べて作らず、信じて古へを好む。	7 - 1		の	の		の		
黙してこれを識し、学ばて厭はず。	7 - 2	○	も					
道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ。	7 - 6	○	み					
悱せずんば発せず。	7 - 8	○	ひ					
暴虎馮河。	7 - 11					ほ		
図らざりき、楽を為すことの斯に至らんとは。	7 - 14	○	は					
不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し。	7 - 16	○						
怪力乱神を語らず。	7 - 21				語			
三人行へば、必ず我が師有り。	7 - 22	○	さ	さ		さ		
其の善からざる者にしてこれを改む。		○						
恒ある者を見るを得ば、斯れ可なり。	7 - 26					つ		
難いかな恒あること。					恒			
釣して綱せず。	7 - 27			つ				
弋して宿を射ず。		○	よ	よ				
誅に曰はく、爾を上下の神祇に禱ると。	7 - 35	○	る					
君子は坦かに蕩蕩たり。小人は長えに戚戚たり。(A)	7 - 37	○			蕩			
君子は坦かに蕩蕩たり。(D)								
威にして猛ならず。	7 - 38	○	み					
	20 - 2							

戦戦兢兢として、深淵に臨むが如し。	8 - 4				深			
任重くして道遠し。	8 - 8	○	に					
詩に興り、礼に立ち、楽に成る。	8 - 9	○	し					
民はこれに由らしむべし。これを知らしむべからず。	8 - 10		た					
危邦には入らず、乱邦には居らず。	8 - 14				乱			
学は及ばざるが如くするも、猶ほこれを失はんことを恐る。	8 - 18	○	か					
命と与にし仁と与にす。※徂徠の解釈に従った。	9 - 1	○	め					
逝く者は斯くの如きか。昼夜を舍めず。	9 - 16	○	ゆ					
苗にして秀でざる者あり。	9 - 21	○	な			な		
秀でて実らざる者あり。		○						
後生畏るべし。	9 - 22				畏			
来者の今に如かざるを知らんや。		○	ら			ら		
歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後ることを知る。	9 - 27	○						
知者は惑はず。(A)	9 - 28	○				ち		
知者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は懼れず。(E)	14 - 30							
勇者は懼れず		○						
疾言せず(疾く言わず)、親指せず。	10 - 17				は			
未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。	11 - 11	○	い					
過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。	11 - 15	○	す	す		す		
迹を踐まず、亦た室に入らず。	11 - 19	○						
己れを克めて礼に復るを仁と為す。		○						
天下 仁に帰す。	12 - 1					て		
仁を為すこと己れに由る。					己			
己れの欲せざる所は人に施すこと勿かれ。※ ※15・23にも見える。	12 - 2	○				お	光村5 三省6	教出2
内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂へ何をか懼れん。	12 - 4	○						
死生 命あり、富貴 天に在り。	12 - 5				富			
兵を去らん。	12 - 7					へ		
民は信なくんば立たず。					立			
諾を宿むること無し。	12 - 12			た		た		
これに居りては倦むこと無く、これを行ふには忠を以てす。	12 - 14	○						
君子は人の美を成す。人の悪を成さず。小人は是れに反す。	12 - 16						☆6	

これを賞すと雖ども竊まざらん。(A)	12 - 18	○	ぬ					
竊まざらん。(B)								
是れ聞なり、達に非ざるなり。	12 - 20	○						
仁を問ふ。子曰はく、人を愛す。	12 - 22	○						
知を問ふ。子曰はく、人を知る。		○						
小過を赦し、賢才を挙げよ。	13 - 2				賢			
近き者説び、遠き者来たる。	13 - 16	○	ち					
小利を見れば、則ち大事成らず。	13 - 17				大			
君子は和して同ぜず。(A)	13 - 23	○		わ		わ	☆3	東書3
和して同ぜず。(C・E)								
小人は同じて和せず。		○						
剛毅木訥、仁に近し。	13 - 27	○			近	こ		
徳ある者は必ず言あり。	14 - 5	○			言			
言ある者は必ずしも徳あらず。		○						
仁者は必ず勇あり。勇者は必ずしも仁あらず。							三省6	
貧しくして怨むこと無きは難く、富みて驕ること無きは易し。	14 - 11	○						
欺くこと勿かれ。而してこれを犯せ。	14 - 23	○						
君子は其の言の其の行に過ぐるを恥づ。	14 - 29	○						
人の己を知らざるを患へず、己の能なきを患ふ。	14 - 32	○						
驥は其の力を称せず、其の徳を称す。	14 - 35	○						
徳を以て徳に報ゆ。	14 - 36				報			
天を怨みず、人を尤めず。	14 - 37	○	て					
下学して上達す。						か		
己れを脩めて以て百姓を安んず。	14 - 45				百			
無為にして治まる者は、其れ舜なるか。	15 - 4					む		
佞人を遠ざけよ。	15 - 10					ね		
佞人は殆し。		○	ね	ね				
遠き慮り無ければ、必ず近き憂ひ有り。	15 - 11	○		と		え	☆1	
躬自ら厚くして薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる。(A・C)	15 - 14	○		み		う		
薄く人を責むれば、則ち怨みに遠ざかる。(E)								
君子は諸れを己に求め、小人は諸れを人に求む。	15 - 20						☆4	
君子は矜にして争はず、群して党せず。	15 - 21				群			
其れ恕か。己れの欲せざる所、人に施すこと勿かれ。(C)	15 - 23			そ		そ		
其れ恕か。(E)								
子貢問ひて曰はく、「一言にして以て終身これを行ふべき者ありや。」子曰はく、「其れ恕か。己れの欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」(F・G)							☆6	学図2 東書3

小忍びざれば、則ち大謀を乱る。	15 - 26	○						
人 能く道を弘む。道 人を弘むるに非ず。	15 - 29				道			
過ちて改めざる、是れを過ちと謂ふ。	15 - 29					光村 5 ☆ 2	東書 3	
君子は道を憂へて貧しきを憂へず。	15 - 31				貧			
仁に当りては、師にも譲らず。	15 - 35				師			
教ありて類なし。(A・D) 類なし。(E)	15 - 38	○			類	る		
道同じからざれば相ひ為めに謀らず。	15 - 39					み		
辞は達するのみ。	15 - 40	○			達			
益者三友、損者三友。(A・B) 益者三友、損者三友。直きを友とし、諒を友とし、 多聞を友とするは、益なり。(C)	16 - 4	○	え	え				
便佞を友とするは、損なり。(A・B) 便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とする は、損なり。(C)	16 - 4	○	へ	へ				
疑はしきには問ひを思ふ。	16 - 10	○	う	う				
性 相ひ近し、習へば相ひ遠し。	17 - 2	○	せ	せ				
鶏を割くに焉んぞ牛刀を用ゐん。	17 - 4			に	牛	に		
涅すれども緇まず。	17 - 7			て				
直を好みて学を好まざれば、其の蔽や絞。	17 - 8			ち				
紫の朱を奪ふを惡む。	17 - 18	○	む					
天 何をか言ふや。四時行はれ、百物生ず。	17 - 19	○						
君子 義以て上と為す。	17 - 23				上			
徹めて(徹へて)以て知と為す者を惡む。	17 - 24			む				
備はるを一人に求むること無かれ。	18 - 10	○	そ		求			
小人の過つや必ず文る。	19 - 8			し				
仕へて優なれば則ち学ぶ。	19 - 13	○	つ					
何の常師かこれ有らん。	19 - 22				之			
命を知らざれば、以て君子と為す無きなり。	20 - 3			め		め		
礼を知らざれば、以て立つこと無きなり。		○	れ			れ		
ぬからぬ先の「論語」	番外					ぬ		

